OFオフTALK

いしい しんじさん

［作家］

「実家には今も子どもの頃に書いていた作文帳などが残っている」と言い、2020年には、こどもとおとなのサマースクール「作文を書こう」も開催されているいしいしんじさん。今回は小学校時代のことと、作文の書き方や指導法についてうかがってみました。

学習塾に対する目が厳しかった時代に小学校に入学

僕の実家は大阪でいちばん古い学習塾です。小学校に入学した1970年代、ちょうど塾ブームが到来しました。当時はまだ塾に対する偏見が強く、教育を金儲けの手段にしていると見られた時代でした。そのため、厳しい態度を取ってくる先生もいました。テストでいい点を取れば嫌味を言われ、やることなすことに否定的な態度をとられました。

そうなると僕は当然、ひねくれてきます。2年生の頃からは自分の名前を使うのをやめ、提出物は全部偽名。作文帳にも「昨日、南極に行きました。食べ物はトナカイしかないので、おなかを壊すのを覚悟で我慢して食べました」などと書いていました。そんな態度ですから、中には厳しくしかる先生もいました。

新任の先生がきっかけで周りの世界とつながれた

転機となったのは4年生の時です。いつものように、作文帳にホラ話を書いて提出したら、新任の山口先生が「先生もニューヨークに行ってみたいんだけど……」と、ぎっしりコメントを書いて返してくれたのです。他の先生と全然違う反応にびっくりするとともに、僕は心から感激しました。

それからは、ただ書いているだけだった作文帳が、先生との会話のようになりました。心の内に鬱屈するものがあっても、それを「誰にも見せてやるものか」と思っていたのに、先生から手を差し伸べられ、気づいたら周りの世界と溶けあっていたのです。「自分には関係ない」と思っていた世界と言葉を通して溶け合え、気持ちのやりとりができる。そう感じられた僕は、自分から周りに働きかけ、自らの世界を広げられる子どもに変わりました。

気持ちを形にできれば、書くのが楽しくなる

学校では作文を「こんな風に書くのだ」と教えられますが、僕はこれには大いに疑問を抱いています。

例えば、「遊び場の形は四角だ」と決めると、円を描くような遊びはできなくなります。「カードを使うことが遊びだ」と言えば、キャッチボールができなくなります。決まりがないとすぐには動けないかもしれませんが、時間を与えれば子どもは自分で遊び始めます。

まずは「犬」でも「ポケモン」でも何でもいいから好きな言葉をひとつ書いてみる。そこからその子なりに「ポケモン」「ほしい」「おばあちゃんが買ってくれない」「動物が苦手」と、広がっていく世界が必ずあります。先生はそれを待ってあげてください。作文がしんどくなるのは、自分の意思ではないのに書かされるからです。

言葉にすること、書くことは、そのときに生まれた気持ちや流れていく時間に形を与え、持ち運びできるようにすることです。日常生活は旅行と違って始まりと終わりがありません。ですが、自分の気持ちを言葉にすることで、小さなことでも思い出になり、うれしい記憶として出したりしまったりができるようになります。

先生が生きるのを楽しいと思うことが大事

子どもは「いま」という感覚が濃厚です。僕の息子が3歳の頃、やたら「きのう」という言葉を使いたがりました。彼にとっていま目の前にあること以外は、3か月前も1週間前もすべて「きのう」。恐竜がいた時代も「きのう」です。10歳ぐらいまでは、どの子も目の前の「いま」に全力で向かっています。

僕は山口先生との言葉のキャッチボールを通して、昨日も明日も変わらない「いま」がダラダラ続いていた日常から、「いまを生きている」という実感を得られるようになりました。先生の何気ない言葉は、子どもの世界を一変させてしまうことがあるのです。

まずは子どもたちが書きたいと思える言葉を投げかけ、その子にしか語れないものを一緒に引き出していってください。先生が自由で楽しい気持ちを持って子どもに対すれば、必ず子どもたちに伝わり、子どもと通じ合えれば、先生自身も楽しいはずです。

言葉にし、書くことで何気ない日常や自分の気持ちを形にできる

PROFILE

いしいしんじ● 1966年大阪府生まれ。京都大学文学部卒業。1994年『アムステルダムの犬』でデビュー。2000年初の長編小説『ぶらんこ乗り』を発表。2003年『麦ふみクーツェ』で第18回坪田譲治文学賞、2012年『ある一日』で第29回織田作之助賞受賞。その他に『トリツカレ男』『ポーの話』、エッセーに『京都ごはん日記』『且座喫茶』、ミシマ社主催のオンライン講座をまとめた『書こうとしない「かく」教室』など多数。